

Shiripaの星

北星学園余市高等学校同窓会誌



コロナ禍だけど

北星学園余市高等学校校長

今堀 浩



同窓生の皆さま、こんにちは。
2022年4月から校長となりました今堀です。

で、自分がこのような立場になるとは思いもしませんでした。校長という立場にはありますが、自分自身がドキドキの連続の毎日です。今堀をご存じの方はきっと「おいおい、大丈夫か？」と心配されていることでしょう。さまざまな判断や決断という責任を伴う立場ではありますが、フロアの先生の力を借りながら、今の所なんとかかんとかやっています。

改めて学校の中を見みると、今堀より古い先生は、菊地（ゴリボン）、安河内（やっさん）、塚原（つかちゃん）、紺野（キャンディー）だけになっています。また、この5〜6年の間に余市校の先生になった人が7人ほどいます。それだけ学校の中も変化しています。

2022年5月18日に、校長就任式がありました。その中で「この間、社会における教育への要求も大きく変わってきました。ただ、この余市高校で大切に考えている「クラス集団づくり」や「人は人の中で育つ」という基本的な部分については、全く変わっていないと思っています。校長と

して、これからもこの大切な部分を堅持し学校運営に取り組んでいけるよう、教職員の皆さんとともに歩んでいきたいと思っています」と挨拶しました。この部分については、今後もぶれないように教職員全体で守っていきたいと考えています。

この3年、コロナで随分といろんな活動が制限されたり、影響を受けてきました。それでも、その時々生徒たちは、どんな形で動けばクラスや学年としてのつながりがとれるか、探って考えて計画を立ててきました。活動が難しい時期でしたが、むしろ全国でも人と人のつながりや学校行事が見直される機会だったようにも思います。余市校のあり方は古いスタイルなのかもしれませんが、人間関係の基本を忘れずに時を重ねていければと思います。

今後ともご支援よろしくお願いいたします。

二度目の北星余市

西野 洋貴（27期）



昨年、年明けに、同級生でもある妹尾克利教頭から、1本の電話がありました。内

容は、柔道の授業及び部活の顧問をお願いできないか？という事でした。現在の私は、柔道整復師として札幌近郊で整骨院を営んでいます。個人経営という事もあり、時間の都合はつかない事は無いが、教員免許を持たない私が、学校での仕事を出来るのか改めて聞くと、期限付きではあるが、非常勤講師としてならば条件さえ揃えば可能であると言う事でした。母校が大好きな私にとって夢のような話であり、喜んで協力したい旨を伝えました。そのような流れで、約30年ぶりに、二度目の北星余市を通した生活が始まりました。余市の景色、校舎の雰囲気等、目に映る全ての事が懐かし、また、時間の経過を感じさせる切なさも入り混じり、何とも言えない気持ちでした。しかし、思い出ばかりにも浸ってはいられないので、気合を入れて道場へ向かいました。自己紹介を終え授業開始。生徒達も皆、私を快く受け入れてくれた事を、とても嬉しく感じました。思い返せば私自身の入学式にも感じましたが、やはり私は北星余市との相性が良いんだなと、思い返せる一瞬でもありました。第27期卒業生である私は、こうして第二の北星生活を満喫しています。期限付きではありますが、残りの北星余市での任務をしっかりと母校へ恩返しできるように常に志しています。この事を、柔道部恩師である伊藤英博先生に報告出来ない事が残念ではありますが、見守ってくれてると信じ頑張っていきたいと思っています。

いつまでも「ゴリポン」

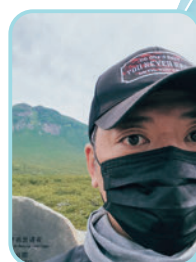
教員 菊地 淳



北星余市高校に勤めて34年、ついに今年度で退職となりました。まだまだ気持ちは若く生徒とバカばっかりやっていますが、気づけばもう61歳です。今は56期3年生の担任で生徒と一緒に卒業です。初めての担任は勤めて1年目の26期でした、まだ全てが旧校舎で何度雑巾がけをしても綺麗にならない床、冬になると雪の入ってくる窓と壁、暖房は石炭ストーブ、熱いのは生徒だけ。今はその旧校舎も、体育館も生徒の熱さでも無くなりちよっと寂しい思いです。26期の担任の時から「ゴリポン」と呼ばれ33年、生徒・親たち・下宿、皆から今でも相変わらず「ゴリポン、ゴリポン」と呼ばれとても嬉しく、ありがたく思っています。学ラン、短ラン、リーゼントから始まり、スマホ、ゲーム、コロナ：というるな時代を経験して来ましたが、全てが良い思い出となっています。退職してもいつまでも「ゴリポン」と呼ばれる様に、「ゴリポン」が似合う様に元気で頑張っていきたいと思っています。34年間ありがとうございました。

近況報告

松原 寛 (26期)



(友)「よう久しぶり！ 松原！ 元気だった？」
まっちゃん！ 元気にしてた？」
(私)「元気でしたよ！ 皆さんは元気だった？」
皆さん元気でよかったわ〜」

昨年大型バイクの免許を取得し8月にバイクで北海道ツーリングをしました。

目的は「広大で美しく美味しいものが沢山ある北海道」をバイクで走り回り各地のキャンプ場で自然を楽しむ事と、久しぶりに恩師、恩人、友人に会う事です。

新潟港からフェリーで小樽港まで行き、1週間で「余市、津別、北見、網走、知床、トドワラ、根室、釧路、帯広、トマム、札幌、小樽、を回る予定でした。(天気の都合で根室、釧路には行けませんでした)

初めて北海道をバイクで走ったのですが、やはり道路は広い景色は美しい。

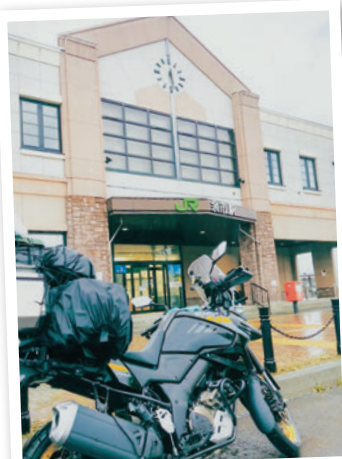
目的地までナビをセットすると「30キロ道なりです」で、信号機が1つも無いなんて事が複数回ありました。北海道の大きさ、大自然の美しさを実感する事ができました。

キャンプ場は本州(内地)とは違い「広い、美しい、混んでない、安い」と最高のキャンプ場ばかりでした。特に網走湖畔の「呼人浦キャンプ場」と帯広の「札内川園地キャンプ場」は大満足させてもらいました。

各地で恩師、恩人、友人、約20人と会う事ができました。直近で会った方でも10年ぶり、まるで会ってなかった方では30年ぶりの再会でした。

まだまだ若いつもりでしたが、私も含め皆さん年をとっていましたね(笑)しかし昔の懐かしい話をしていると、つい先日の事の様な気になるのは不思議ですね。

会えた皆さんと北海道の大自然のお陰で普段のストレスから解放された1週間でした。



北星余市を卒業し、進学、就職、結婚、病氣、など楽しい事や苦しい事は沢山ありましたが、何とかなったのは北星余市での楽しく辛い3年間があったからだと思っています。

北星余市の教職員の皆様、同級生や同じ寮の仲間達、関りが有った全ての方々に感謝しております。



心のコンパスを信じて —会社を退職し、家族で京都に—

後宮 嗣 (41期)



2020年4月。私は、10年間務めた会社を退職し、妻と1歳半になる娘と共に京都に引っ越した。目的は、同志社大学に入学し、牧師となること。また、教員免許を取ることであった。この二つの職業は、まったく別のものではない。その二つの職業は、一つの生き様として統合されると考えている。その生き様とは、他者と「共に生きる」ということなのではないかと思う。こうした考えを持つようになった経緯や原点を思い起こすとき、そこに在校中の友人、先生との対話によって作り出された価値観があることを痛感する。私の「心のコンパス」なのである。「ありがとう」と初めて言われた経験ではなかったか。社会では心の底から「ありがとう」と言われることは滅多にない。ただ、「共に居る」だけで救われる人もいることは忘れてはならない。現在、御所の近くにあるバザールカフェというお店でボランティアをしている。

このカフェには、多様な顔があるが、その一つに依存症で苦しむ人が、スタッフとして働きながら、社会復帰を試みる場として機能している。先日、カフェの付近の道端でしゃがみ込む80歳の方とであった。話を聞くと、刑務所から出てきたが、その後の行き場を完全に失っていたのである。カフェのスタッフが、家の手配、生活保護の手配などサポートを行ってはいったが、電子レンジの使い方を理解できないなど、自活することは厳しい状況であった。彼は毎日のようにカフェに来て、ご飯を食べ、スタッフのスマホで美空ひばりの曲を嬉しそうにきいている。いよいよ3年間通った大学院が修了する。他者と共に生きる」という「心のコンパス」を信じて、第二の人生を送っていききたい。



近況報告

教員 菅野 瑞希



北星余市の卒業生の皆様、私は54期が1年生の時に北星にきました。知らない人もたくさんいると思います。すが体育の教員をさせてもらっています。

今回初めての担任を持つてなんとか、卒業生を出すことができました。隣のクラスの担任のゴリポンにはとってもとっても助けられました。菊地先生が最後の担任、私が最初の担任というところで、たくさんのことを教えてもらいながらの3年間でした。

3年間本当に想像しきれないようなことが現実起こって、驚くひまもなく、次から次へと問題が起こる最初はそんな1年でした。

1年生の最初はコロナによりZOOMでのスタート、会ったこともない生徒たちとオンラインHR。ここが一番しんどかったです。やっぱり顔は見えないけど、オンラインだと気持ちとかが伝わってきにくいし、空気感もわからない。オンラインでできることは限られているけど今ではやってよかったなと思っています。ですが、あのZOOMの期間がずっと続かなくてよかったです。

2年生からも色々ありましたが、人間関係では一番もめたと思います。私の基本姿勢が思っていることは相手に伝える、口に出すなので、話し合いでもめるのも、言い合いもやれやれと言ってきた。この3年間で少しでも相手に自分の気持ちをはっきり伝えることが出来ることもが増えていたらと思います。

なんとか卒業までたどり着くことができ、とてもうれしく思います。私もやっと担任としての北星余市の3年間で過ごせたのだなと思っています。また、担任をやらせてもらってたくさんのことを勉強させてもらいました。このコロナを通して対面で行うこと、人と人とのつながり、かわりがどれだけ大事かがわかりました。これから北星余市を通してたくさんさんの経験をしていけたらと思います。



旧校舎・旧体育館が取り壊されました

1965 年創立から北星余市の教育を見守ってきた旧校舎等の全てが 2021 年 7 月取り壊されました。

事務室から見える跡地はガランとして、旧校舎等で過ごした色々な思いが（級友・先生・行事等）走馬灯のようにこみ上げてきます。

古き良き時代が、また一つなくなりました。



活動報告 I

同窓会の奨学金制度の 利用状況等について

母校の教育活動を支援するという同窓会の目的実現のため、同窓会では奨学金制度（給付型）をもうけています。

会員のお子様が北星余市へ入学した際、希望者には在学中の授業料等を補助しています。（月 /5,000 円、2 人目が同時に在学中は 5,000 円×人数）

2022 年度は、2 年生 1 名に利用していただきました。

なお、本奨学金は、同窓会で運営する自動販売機（校舎 1 階ホールに設置）の収益金の一部より運営されています。

活動報告 II

同窓会役員に 新メンバーが加わりました

37 期の西岡 知洋さんが、同窓会役員として 2022 年度から一緒に活動してくれています。

西岡さんは、余市教会というキリスト教の教会の牧師・リタ幼稚園の園長として活躍しています。

年に何回か学校に来ていただき、月曜日の全校礼拝、生徒が教会に出向いたり北星余市とは卒業後もずっと長い付き合いです。



計 報

2022 年 5 月か 6 月 北垣俊一さん(元教員)
2023 年 1 月 9 日 中村要一さん(14 期)

お悔み申し上げます。

〈編集後記〉

年が明け、仕事初めから数日過ぎたある日、姉から「要一亡くなったらしいって聞いた。間違いならいいけど…」と連絡が入った。??? そんなことあり得ない、年賀状きてたし…と思っていたら、夫からも「要一死んじゃったって…」と連絡があった。

半信半疑でお通夜に向かった。遺影を見るまで、いや遺影を見ても現実には思えなかった。

体調が悪かったわけではなく、仕事中に突然倒れそのまま逝ってしまったこととお通夜のお坊さんの話で知った。還暦のお祝いを終えた半年後だった。

若い頃、お正月には余市の実家で、父も母も交えていつものメンバーで宴会をした。一緒に旅行やスキーも行った。お金もないのに毎週のようにススキノに飲みにも行った。家族ができてからはお正月に家族みんなで顔を出してくれた。コロナ禍で父が亡くなった後、暫くして「おじさん、死んじゃったのか…」とお線香をあげに来てくれた。いつも会うわけではないけれど、ずっと仲良しだった。

告別式が終わった夜、ふと「お母さんが死んでも、知らせる人いなくなっちゃった…」と思ったら、何だかすごく寂しくなってまた泣いた。

何年か会っていなかったけれど、いつでも会えると思っていたのに、もう 2 度と会えないことが何より寂しくて悲しい。(元)

Shiripaの星

Vol.20
2023 年 2 月発行

〔発行〕北星学園余市高等学校同窓会「シリパの星」編集委員会

〒046-0003 余市郡余市町黒川町 19 丁目 2 番地 1

TEL (0135) 23-2165 FAX (0135) 22-6097 URL <http://www.hokusei-y-h.ed.jp/>

顧問 塚原 治
編集長 松村 悦子(15期)
副編集長 松浦 一法(12期)
編集委員 安藤 栄子(1期)
本間美智子(5期)
馬場 希(12期)
平野満寿美(14期)
高崎 麻美(40期)
西岡 知洋(37期)